

2018年7月5日

厚生労働大臣 加藤 勝信 様

B型肝炎ワクチンをすべての子どもに接種するための要望書

B型肝炎はB型肝炎ウイルス(以下、HBV)が血液や体液を介して感染する疾患です。出産時や乳幼児期にHBVに感染すると9割以上が持続感染(キャリア化)に移行し、HBV持続感染者(キャリア)となります。キャリアは自然経過において慢性肝炎から肝硬変、さらに肝がんに進展することがあります。

B型肝炎の制圧には、キャリアの母親から新生児への母子感染(垂直感染)を防ぐためB型肝炎ワクチン接種が不可欠です。世界保健機関(以下、WHO)の統計によると、キャリアは3.6億人以上と推定され、1年間に約62万人がB型肝炎に起因する疾患で亡くなっています。HBV感染者はアジア、アフリカに多く、わが国では100~130万人のキャリアが存在すると推定されます。

わが国では1986年からHBV母子感染防止事業が開始され、垂直感染によるHBVキャリアの成立が阻止され、若年者における感染者は著しく減少しました。しかし、母子感染以外に父子感染や家族内感染はみられ、若年成人では性交渉に伴う水平感染によるB型急性肝炎の発症数が増加しています。近年では急性肝炎が遷延し、慢性化しやすい遺伝子型AのHBV感染が増加しています。さらにHBVの一過性感染でもHBVの遺伝子は肝細胞の核内に留まり、感染既往者の免疫低下に乗じてHBVの再活性化が起こることがわかりました。

一方、HBワクチンの効果は絶大であり、特に小児に対してはHBワクチン接種者の90-95%に抗体産生がみられ、抗体が消失しても、接種者の多くは免疫記憶を維持していることが判明しました。また、日本肝臓医学会評議員(専門家)を対象とした調査でも、肝臓専門家はHBワクチンの適切な接種時期(キャッチアップ)は必要ないとする専門医はわずか2%である、逆に98%の専門家は水平感染予防が必要と考えております。最も効果的なのは子どもに対する予防接種です。

2016年10月からゼロ歳に限りHBワクチンの定期接種が始まりました。今後はすべての子どもたちにHBワクチンを接種することが大切です。先の肝臓専門家はHBワクチンの適切な接種時期(キャッチアップ)は小学生高学年としております。

以上

特定非営利活動法人 小児肝臓研究所 理事長 藤澤 知雄